

香蓮齋文集句讀所大成

五十四

記	66
號	
冊	5

中村俊定文庫

文庫 18

809

4



朱紫心叙



いふも世に違はれつゝ母市に
臨しるを名あきあき友隊飛菴
如くは鳥の東乃大江にちき
越るれしむる路一あはぬを
より家とめり家れをわしれ
又乃巻く女に新兒をされ
知よるし又の女にむすよ

むかやちをてあふひ或らたれけを
先法らるるしやちりさるたり
きとふにわのれ浦里れ遠にやる
法とけれ道れさ城よりてわく朝
若舟に舟舟舟字やむむ老れ業
やせありわましく遊借のりら祿うた
くふあよふく世あひあれ事地
左しあらまは事人、あひましく母

質とて天波惠城善なりなりて法乃
格とて小位に昂れ実た此るなり
形とて多りやしく倉とて一と揚物れ
旅癖ふさく原や大津れ台牙起ゆし
なるとなり一里れ稱しきそのうたれ
くやしく城のあやに岡者なりさ
宋本堂中やんやめれなり一さふ
清島うしてはいつくあふはくそ様

と成りしむし猶舟大しと寸口屋了風
等も正法れしと竹まぬ我れ此等經子
下も成りしむし亦やある所引 經義に
あつてもさしと此又車法穀字をす
家もとみやむと此罪人とははし
中し白刺も亦知是くし

天明三年十月

序ノ七

朱紫卷之一



東都 法橋吾山 著



おまむれ玉垣むらさきの好瑞。祿さびくる法園のめしはらふ
ちらと求めて。志づくこの旅舞をさへさるりまき。さるら
日大津ある台斗といふ人たどせし訪ひまうり。さるらに
むらびきく老をかくさめらるらこびりさた。長途のつらさを
あんで物語とらるらまらるら。ある日台斗同く云。芭蕉の長句
の正解。杉雨が译林。蕉太が句解。沙を袋不名。おのこの歌。政
得て。素丸老人況叢大全を著してあつて。く謬を訂正し
亦も沙を袋ハ誤。洒う。虚こ。妄ま。なりといふ。かこれとく法家給ふ
吹よまどい。半信ま。一ま。半信ま。師し。況ま。ま。ほま。一ま。善ま。

らよ、清つける梅の花ありさういあまど 予いふ何となく鏡
のうらのごとく人も見えぬ梅ありといふあゝるをおめり

○ 歌日記 福玄畧

○ 大伴俊の年れさうめい何佛

若れ事をむの故よとてくくして、こヶ日るあつは日を大伴とこ
はあ。このふやでい出ざうつるさくの信も夜の神を春風小
舞して。大伴少海をゆふよさぬさふつけく。さの信海赤
い影る佛をやと初とてん。こヶ日を神代は比一さ
信信あると去来いつ

○ 春うらさくまうじ九日の群中

古今集春上 壬生忠岑 春うらさくといふさううらやみ

は、ゆもるさくけいいもん。大物さくは任波のふくけられさ
あもけふ上ふのさく一はさく。長白も幽玄ゆくたけさく
神よあくは連さふはくは海傍の上おちるものく。む月のせみ
いまさすはよまされそのりさる。不をえおく。信信うらさく
一唱く。嘆さくさふさくさく

○ 二月堂ふ巻アとて

○ 水さるやあ乃信の皆のあはと

けり法二月朔日より十四日まで二七ヶ日あり。十二日の後夜
に水さるとて堂前の洞伽井の香のさをほぐく。舟下とあひ
まよとて二月堂の牛玉と散む。げ氷ハ若狭をさふた殿神
より献むとて云傳ふとていと神事かれん。さくさくさくは法の

傳氏よ葉葉き いかれいむよまつとふ言れ接をりたて秘くふハ
せぬ。けい一の句のむをよく無きなり。次の句は紙に入葉をよむ
けいばあはくは略る。昔の言はよておは秘ぬもや。氣もこゝに
あうて秘るあまの葉をよまれてあうも定めぬうてよ
いさも花よ秘ぬたふうとあうてせぬる句也巧た
とも子ねあまううあまのこ

○琴の画賛

○ちるむやもたれとろく琴の巻

ふ氏よ葉葉きふ 三月つごらう山山く琴を流すもあ
ちるむやもたれとろく 秘及略 けい一のむをつらうて。琴の巻を
たふらうまむもあまうと。梁上の巻を拂ひ一故事小

巻の字本あり



○以春やと峰魚乃月いたる

けい一の葉葉以脚の対ふ葉と云あま 難いの吟あう 又甲子
古今集よ 唱する存のあまやあつんものあまの葉
上のあま。このあまはあは存の流しとあまを魚れ月いたる
いひくるる作を妙ありて秘情うらうらう。けい一も初め
かの魚の存の眼あま。言れをねる涙と涙も唱とりか
洞とよむこと也 魚の涙ハ博物志 鮫人従水中出曾寄寓人
家 積日賣給鮫人臨去従主人索器泣而出
珠満盤興主人 杜甫詩 感時花濺淚恨別鳥驚心
あまうのこを返念の句なり

追考鮫人の指物志より一 廣博志よりあま

小山流の御小うつらにけり。或時道遠院まゝに遷うつる。宗澄むねは流に
これに杜る。と作らるるの侍りこれに流といせしむ心
算のりたる句解ふ。道遠殿下流山云。宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
を流流あるて。宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
のちんとすれど甚れはあり。宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
又宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
撰せん者しやの流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
外ほかおのひけお流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
と深ふかせしむる。と作らるる侍りこれに流と
是非を論むる。と作らるる侍りこれに流と

めて河原の時。宗長法師はい出る。宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と

道遠殿下流云。百六代後宗良院天文三年誕生百九代
後水尾院安長十七年八月薨ひが七十八法名流山
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と
宗澄むねは流に遷うつる。と作らるる侍りこれに流と

逍遥院交遊云 法家幼信抄記云交遊元公世及公延承正
内大臣正二位天文六十^{月日}薨 十三法名克空号逍遥院

と云ふは新山公十策のころ交遊寂す。交遊公交遊は同村の人。
是木の年代を考て他説を却て。又杜若の句をかしらばこと
濁して留^{とま}りし是非あらず。交遊公限^とるはいける卑^せの者。
とも。さきのけりしるる茅^や屋^や立入^りもけり。いも海^{うみ}がさし
吟を留^{とま}らん。そ者さまのゆゑ風^{かぜ}の情^{なさけ}あめ。そよよの
しく俄^が鬼^{おに}といふもや作^{つく}るるや。青^{あお}い^いは^はが^がち^ちん^んご^ごま^まに^に御^ごま^ま
のちのそのふくろがたさある。是^{こゝ}我^{われ}法師^{はうし}の運^{うん}次^じ十^{じゅう}使^し也。
貴^{たか}く^くして高^{たか}位^いな^なり^りと^と記^しせ^せる^るは^はた^たの^のふ^ふあ^ある^るや^や、^そも^も成^なり^り
の心^{こゝろ}を^をさ^さる^るも^も時^{とき}た^たと^との^の海^{うみ}が^がち^ちん^んと^とや^や、^そも^も成^なり^り。

さきにもかたつこと大極^{おほきま}ま^まに^に成^なる^る也^{なり}。俄^が鬼^{おに}と留^とり
交^ま遊^{ゆう}を^を留^とる^るの^の詞^{ことば}と^とは^はら^らい^いの^のま^まに^に句^くを^をさ^さる^るも^も成^なる^る也。
さ^さら^らに^に万^{まん}葉^{えふ}は^は女^{にょ}縁^{えん}鬼^{おに}男^{おとこ}縁^{えん}鬼^{おに}も^も成^なる^る也。又^{また}その^{その}時^{とき}代^{だい}は^はら^らの^の風^{かぜ}
と^と成^なる^る也。あ^あら^らに^に御^ごま^まに^にま^まに^に成^なる^る也。

日乃乃ち夢のしくく入月也

日月の晴るもまたは^はる^るの^の日^ひ影^{かげ}の^のん^んび^び東^{あづま}も^もお^おぼ^ぼつ^つも^も成^なる^る也。
あ^あら^らに^にの^のん^んび^びと^と成^なる^るも^も成^なる^る也。日^ひの^の乃^のを^を成^なる^るも^も成^なる^る也。げ^げの^の乃^のも^も成^なる^る也。
と^と成^なる^る也。一名^{いちめい}文^{ぶん}菊^{きく}又^{また}は^は乃^の乃^のと^と成^なる^る也。あ^あら^らに^に夢^{ゆめ}は^は日^ひの^の乃^のと^と成^なる^る也。
事^{こと}なり。左^{ひだり}傳^{でん}葵^{あひ}能^{のう}衛^{ゑい}其^{その}足^{あし}の^の葵^{あひ}は^は返^{かへ}世^よ情^{じやう}足^{あし}と^と名^なを^をら^らり^りの^のん^んび^び又^{また}は^は葵^{あひ}は^は入^い月^{げつ}也。
さ^さら^らに^に大^{おほ}い^いの^の乃^の乃^のも^も成^なる^る也。信^{しん}名^なの^の乃^の乃^の又^{また}は^は葵^{あひ}は^は細^こ事^{こと}なり。

夕白也秋のゆくも

古今集秋上歌不知よこ人志^{こゝろ}は^はみ^みと^と成^なる^る也。

かゝるうたしとるおをいって不福である人たさうさ。夫
秋の国あり。或は湖をよむつ或は秋意をよむつとていふもあつた。白
もよむれ。紀伊の二峰とありて。

○

こちうのるやあはれ、合飲のむ

東波、西湖の詩あり

水光瀲灩晴偏好

山色朦朧雨亦奇

若把西湖比西子

淡粧濃抹兩相宜

はる二の句は、湖上のたゞこころう山ありあうさぬをいふ。こころをいふ
情の哀みのかぎりなれを偲て。若情のこもじや、ちうとて人つとを
ひよとていふ句調。またこころの理の画景。水上の文字。枯木よむを
なごらむ。淡粧、濃抹、小娘、西子。夫の詩をゆきて。西の湖景を西波

が福をふたとしう、坡この言通、蒼のぬ、瀾、ま、い、あ、ふ、ら、
半あり、い、ざ、ら、い

○

六月や、峯ふせ、お、く、あ、ら、い、し

峯、乃、落、榜、舎、向、井、氏、少、之、の、句、こ、れ、月、の、暑、さ、日、に、あ、ら、い、し、
名もたのむう、あるふ。一天を、嶽、く、吹、た、ら、い、つ、ふ、た、た、い、嵐、の、
ふも、い、は、と、お、さ、い、い、物、中、よ。又、控、つ、た、ま、の、奇、一、く、も、
ハ、ま、れ、た、の、ま、ま、さ、ら、い、ら、ふ、も、あ、ら、い、し、と、あ、ら、い、し、
不、む、ら、い、た、ふ、も、あ、ら、い、し、と、あ、ら、い、し、と、あ、ら、い、し、
ら、小、ま、さ、ら、い、の、う、い、情、は、異、あ、ら、い、し。

佛をたすけしむるもけし業の重なりぬりぬすしむるも

○ 素裳亭 十日通 河女里書

いさよしいいよまふ今胡よはらるる業

河女よ竜山の事とあるは宗教の好ましく。されは日いられお業
ハ九日あるをさしてとてたすす。十日の月のうけつため。十日れ
業のうらひをたすを。いさよけしむと親恵の白も

○ 園越る日いぬ海へいぬれをふ海にさす

ちろーぶと富士をいぬ日と面白

お根海に渡りよこしとく一とく時とく海へさすあつりよく
け日のまおむもたれお時ぬのおりろく。いづくに海をたす
いこそとけもあつりく。ちよちよち程ハその名をあつりて。候

「いさよ」

はくー即ちこれより一入んところかた。おまじ。おまおてさ
じやまじと藤のうまひとさくいんうらうら。たよいお
ちよと面白とてんた。お富士をいぬ日と面白。面白
少く。まあさうら。○け白まに海軍の元政 「いーけいの中くま
その及ぶぬおたその海軍とていぬいぬが海軍とていぬいぬ一
おまじ。おまじとていぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ
あつ風物とていぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ

○ ちろーぶと富士をいぬ日と面白

その中ハいさよふと海のちろーぶ

よいさよふと海のちろーぶ

宗法法沙の面白

ちろーぶと海のちろーぶ

真
五